

じ……禪定が終りきらない時、中国の使節……保住 Jarjuct の三人が直接宮殿に至り、その日のうちに敕書を手渡ししたいと急がせたが、チカン・クンチョの適切な応待で禪定が終るまで待たせた。内禪定が終った十四日の当日も敕書を持って宮殿に至り、せきたて、(私ハサンゲギャツォが) 会いに出ないなら食物など要らぬと皿を投げ、彼等が誓いを立てる時こうするのだと云って力を抜いて見せるなど大変な荒れ方であった。外禪定期が終っていなかったが、余りにせきこんだ振舞いが数々あったので、十五日カムスムの部屋で……など蒙古の使もまじえて彼等と会見した。席上、敕書と布六反の副え物をよこし、六か所の蒙古に配った敕書の一つでアヌの許にあったというものを見せ、ゴカル地方の刀を噶爾丹王のものだと示し、噶爾丹と私を同一視したお叱りの敕書と、同様の敕書を沢山伝えた。結局いうところは、五世が先ず在世するかどうかをこのラマに調べさせること、パンチュンを招きに応じて送り出すこと、(タツァク) 濟隆活仏と (Tshib/Isa) ポシヨクトジノンのもとにいる噶爾丹の女をとらえて北京に送り届けること、これが出来なければ、皇帝が軍をひきいて来るか、軍をさしむけると仰云るのであった。保住も、強力な大軍をととのえていることや、プータンが清帝に誼みを通じている旨をつけ加わえた。ジンバギャツォとディムチの二人は五世に献上する敕書をもって会見を待つて留り、保住に

批評と紹介

第八
辻

は、きつい言葉を賜ったことに對する当方の申し開きの御説明をするためと戦捷の祝いのカタ、仏像、旗、奏上文を副え物ともどもさし出すためにツォナケツウンを伴わせて、送り出した。

以上で著者の訳文を点検する一つの手がかりを示し得たと思う。畢竟するに、著者は功を急いで、成るべきものを成さず示したとしか評者には云えない。明らかに有能な著者のために惜んで余りあるが、今はただ、後日の大成に期待したい。

Zahrudn Ahmad : Sino-Tibetan Relations in the

Seventeenth Century, Roma, 1970

(TsMEO, S.O.R. XL).

ヴァイディカ・サンショータナ・マングラ出版

タイッティリーヤ・サンヒター(第二冊)

辻 直四郎

プナーの上記出版所は、パッタ・バースカラならびにサーヤナの注釈を伴うタイッティリーヤ・サンヒター(『S』)の太出版の第二冊を公刊し、堅実な進捗を世に示した。その内容・体裁、学術的水準・特徴、鮮明な印刷等は、既刊第一冊の場合に等しく、本誌第五十四巻(一九七一年)、二五九—二

第五十五巻 五二三

六〇頁に紹介したところに加えることはない。ここに再びシンタッケおよびダルマーディカーリー両校訂者の学殖と努力とに甚大な敬意を捧げる。

第二冊はタイッティリーヤ・サンピター第一篇・第五——八巻を収め (ed. Weber. p. 55-125) その主な内容は Punarḍheya 「祭火の再設置」および Agnyupashana 「祭火の崇敬」(五) Aśtikayājana 「新月・満月祭における祭主の役割」(六—七) Vajapeya 「ヴァーシャペーヤ祭」(七・七——一二) および Rājasūya 「即位祭」(八) に概括される。特にヴァーシャペーヤとラーシャスーヤとは、ヴェーダ祭式の研究者にとって重要である。第一冊におけると同様に、注釈中の引用文に対して一々その出典を附記していることは、研究者に多大の便益を提供する。上記ラーシャスーヤ冒頭の一節 'Anumatī' (Anumati) と Nirriti (Nirriti) のための献供 (TS. I. 8. 1) に於ける注釈を例とすれば、バーメカラ釈中にはタイマハーリーヤ・バーンフナ (TB.) から七回 'バーニニ文典から一〇回' ビット・スートラ (Phisūtra) から一回 (I. 8. 9, 10, 18 などの10の語植) サーヤナ釈中には TS. から一回 TB. から一回 'ンサマ一ヤナ・シラウタ・スートラから三回' マーンメタベン・シラウタ・スートラから二回 'マヤラ・コーシャから一回' 引用箇所が指示されている。注釈文献を理解するために、こ

れらの引用を確かめることは容易でなく、この労を省く校訂者の考慮は多とすべきである。

筆者は従来シラウタ・スートラの作者ができうる限り所依のサンピターおよびバーンフナの儀軌要素 (vidhi-elements, sūtra-elements) を顧慮し、これを基礎として各祭式を詳しく叙述・規定していることを主張してきた。ラーシャスーヤに関して、バーンフナラーヤ派のサンピターとシラウタ・スートラとの関係を調査したが (cf. Notes on the Rājasūya-section (IX. 1) of the Mānava-śrautasūtra. Memoirs Toyo Bunko Nos. 23, 1964 and 25, 1967) 今 TS. 及び TB. から上記 Anumati-Nirriti 献供に関する儀軌要素を摘出すれば次の通りである。

TS. I. 8. 1. 1 (ed. Poona p. 305.1-p. 308. 1): anumatyai puroḍaśam aśṭakapālān nirvapati, dhenur dakṣiṇā. —ye pratyāñcaḥ śamyāyā avaśīyante tañ nairitam ekakapālam, kṛṣṇaṇ vāśaḥ kṛṣṇatūṣaṇ dakṣiṇā—vīhi svāhātūtiḥ juṣṭā, eṣa te nirrite bhāgo, bhūte haviṣmaty asi, muñcemam amhasaḥ.—svāhā namo ya idān cakāra. TB. I. 6. 1. 1; anumatyai puroḍaśam aśṭakapālān nirvapati.—ye pratyāñcaḥ śamyāyā avaśīyante tañ (sic) nairitam ekakapālam.—nairitena pūreveṇa pracarati.—ekakapālo bhavati—yad ahutvā garhapatya iyuh... (cf.

Caland ad ĀpŚS. XVIII. 8. 16).——2. (gārhapatya 祭火への ājyāhuti) vihi svāhāhutih jñāna ity [TS. I. 8. 1. 1] āha.——(外田) ekolmukam (ed. ĀnS. °ke du. ? cf. BaudhŚS. XII. 1 : p. 86.1 : tad etad ekolmukam upasamādhaya) nayanti ('man geht mit einem an einer Seite brennenden Scheite' Caland l. c.)——imāñ dīśaśh nayati.——3. (Nirṛi 敵供) svakṛta iriṇe pradare vā.——esa te nirṛe bhāga ity [TS. I. c.] āha.——bhūte havīsmaty asity [ibid.] āha.——muñcemam amhasa ity [ibid.] āha.——aṅgusthābhyāñ juhoti.——4. kṛṣṇaṇ vāsah kṛṣṇatūśaṇ dākṣiṇā.——(祭場への帰還) apratksam āyanti.——(ājyāhuti) svāhā namo ya idañ cakāreti [ibid.] punar etya gārhapatye juhoti.——(Anumati 敵供) anumateṇa pracarati.——5. dhenur dakṣiṇā.

この註説をよむを避けるが、これらの儀軌要素を例へて BaudhŚS. XII. 1 : p. 85.5-p. 86.7, ĀpŚS. XVIII. 8. 10-9.1, HrŚS. XIII. 3. 12-24 など翻せば、シヤウマ・モーター形成の経過を窺うに足るものがある。

今回の第二冊によつてタイティリーヤ・サンヒターの第一篇は完結し、全体のほぼ六分の一が刊行されたことになる。少くもこの間隔で全篇が学界に提供されることを切望する。

(Taittiriya Samhitā, with the Padapāṭha and commen-

批評と紹介 辻

aries of Bhaṭṭa Bhaskara Miśra and Syaṇācārya, Vol. I part II (Kāṇḍa I Prapāṭhaka V-VIII), Edited by N.S. Sontakke [and] T. N. Dharmadhikari. XVIII, 480, 2 (Corrigenda) pp., Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala, Poona 1972.)

クリヤシニトルヌイ、リフシシ共著

セウレイ石碑

護 雅 夫

一

本論文の共同執筆者——以下、筆者と呼ぶ——の一人、チエルク学者クリヤシニトルヌイ (S.G. Kiyastorniy) は、一九六八—一九六九年に、モンゴル人民共和国内部でフィールド・ワーク (polevoe issledovanie) を行なった。この紹介する一石碑——セウレイ石碑 (Sevrejskij Kamen)——は、そのさい(一九六九年)、彼が調査したものの一つである。もっとも、この石碑の発見はこれに始まるわけではない。ごぎに述べるように、その存在は、彼の調査より約二〇年前に知られていたからである。

一九四八年の夏、ソ連科学アカデミー派遣の古生物学調査